

コモド諸島上陸記録 — コモドオオトカゲの現況と環境 —

大賀 二郎*

The Komodo dragon and the environments Jiro OOGA

はじめに

インドネシア共和国領コモド諸島では、19世紀に巨大爬虫類が発見されて恐竜の生き残りかも知れないとの説があった。現在では恐竜との類縁はなく、白亜紀にどこかの大陸から流れ着いた種が孤立した島で独自の進化を遂げたとする説が有力である。通称はコモドドラゴンと呼ばれるが、和名、学名はコモドオオトカゲ *Varanus komodoensis* Ouwense, 1912 オオトカ科である(写真1, 2, 3)。同諸島はサンゴ礁の広がる海洋生物の保護区でもあり、コモド国立公園としてユネスコ世界遺産に指定されている。今回同諸島を訪れた目的は同種のような大きな体が食資源の乏しい熱帯多雨林の島礁でどうして種を維持できたか、また現在の環境に関心があったからである。2011年8月7日同諸島リンチャ島とコモド島に上陸した。(写真4)。入域は管理機関の許可と指定レンジャーの同伴が必要である。個人の行動は許されない。同種は人を襲うことはめったにないが、その能力はある。レンジャーは銃を所持しないが3mの二股の棒をもって、危機に対処する。

両島には簡易宿泊施設はあるがホテルはない。原則として滞在はできない。環境保全の視点からである。行程はつぎのとおりであった。

- 08:00~09:10 空路デンバザールからフローレス島
- 09:10~09:40 島内移動
- 09:40~10:20 スピードボートでリンチャ島へ
- 10:20~11:00 リンチャで海辺の個体観察
- 11:00~11:40 コモド島へスピードボートで移動
- 11:40~13:00 コモド島内トレッキング 個体観察
- 13:20~14:20 島内ピンクビーチ再上陸
グラスボトムボートでサンゴ礁観察
- 14:20~15:20 スピードボートでフローレス島へ
- 16:30~17:30 空路デンバザールに帰着

コモドオオトカゲ生息の現状

世界でコモドオオトカゲ(以下オオトカゲという)が生息しているのは、コモド諸島に限定される。そのうちフローレス島とコモド島に併せて2,500頭の生息が推定されている。近年は頭数の増減はない。種の生存は野生のまま維持されている。

飼育・餌付けは一切しない。彼等の餌となるのは、島内で野生化したシカ、イノシシ、ノブタ、スイギュウなどである。何れも自力で餌にしている。リンチャ島には小規模の村があり、飼育しているニワトリが襲われることがあるが黙認しているという。オオトカゲはこの観光資源であるからである。大きな餌を襲うときの彼等の武器は強靱な尾で哺乳動物を足払いでなぎ倒し、強力な顎で噛み付く。唾液には腐敗菌があり、スイギュウなどの犠牲はこれで弱るとされている。なお最近の研究で奥歯に微量だが、毒蛇の成分に近い猛毒があることが発見された。同島にはグリーンズネークと呼ぶ猛毒蛇がいる。オセアニアにいるのと同種である。オオトカゲは、視力・聴覚は弱い、先が二枚に分かれた長い舌があり、動物の接近、餌の識別、環境の異変など感知できる能力がある。弱ったスイギュウを臭いで居場所を探し出し、集団で襲うことが常である。胃袋は大きく、食い溜めができる。更に変温動物でエネルギー消費が少ない。通常は高床コテージの下など群れて仮眠していることが多い。人間との間で信頼関係ができていくように思える。オオトカゲの犠牲となった動物の頭蓋骨が研究所の庭に並べられている。人間のものは今はない(写真5)。なおオオトカゲの幼体の餌は鳥の卵、ネズミなどである。

オオトカゲを殺傷することはどのような場合でも禁止され、厳重に保護されている。反対にオオトカゲが人間を襲うことはアクシデント以外通常はないとされている。当日両島で観察できたオオトカゲの個体数は30頭程、大きなものは2m程であった。(これまで観察された大型個体は3m, 100kg)。サバンナの草原を歩行しているものもあった。這うというものでなく、胴体を上げて尾を伸ばし四足で歩く。勿論相当の速さで走れるし、木漏れ日の下では存在がわからない。空

腹時は危険。この項の記述は、同伴した現地ガイド(環境保護委員)の説明の要約である。

コモド諸島の環境

東経120°南緯10°付近に位置する諸島はオーストラリアに近く、殆どが不毛の草原で山間部は灌木帯でその中に高木が点在する。岩石の山もある。海岸はマングローブに囲まれている。動植物に乏しく前述のように人間が持ち込んだ家畜が野生化して定着している。その生態系の頂点に立つのがオオトカゲである。家畜ではないが、カニクイザルの活動が海岸で目立っていた。疎林には着生蘭・羊歯やアナナスがよく生育していた。ここだけの固有種もある(写真7, 8)。反面、海中の珊瑚礁の成長は著しい。透明度は高くグラスボトムボートで極彩色の魚の遊泳する海中森林の景観を窺うことができるシュノーケリング、ダイビングな

どのレジャー施設がある。ピンクビーチは特異な現象でできた砂浜で、赤いサンゴ、白いサンゴが粉末となり、混ざり合ってピンク色の砂浜を形成している(写真9, 10, 11)。

おわりに

コモド諸島を含む小スンダ列島は、太平洋とインド洋の接点に位置する。この狭い海峡を両洋の海流が流れる。近年インド洋の海流が太平洋に流れる力が強く、青い色をしたインド洋の海水が少し汚染した太平洋に流れ込み、分離帯が識別できる。当然のことながら波が荒い。小規模の船舶の航行は困難になった。(この項はガイドの説明による)。

コモド諸島は火山列島の中に位置する。種の保存のための環境保全はよく保たれている。ただ列島の地理的環境は非常に流動的である。



図1 インドネシア西部周辺



図2 コモド島周辺



写真1 コモドオオトカゲ体長2mの頭部 雌雄区別不明



写真4 コモド島ののどかな港風景



写真2 地面を歩行するオオトカゲ



写真5 オオトカゲに襲われた動物の頭蓋骨



写真3 木漏れ陽の中では保護色



写真6 オオトカゲの観察に向く人たち



写真7 サバンナの疎林と着生蘭の一種

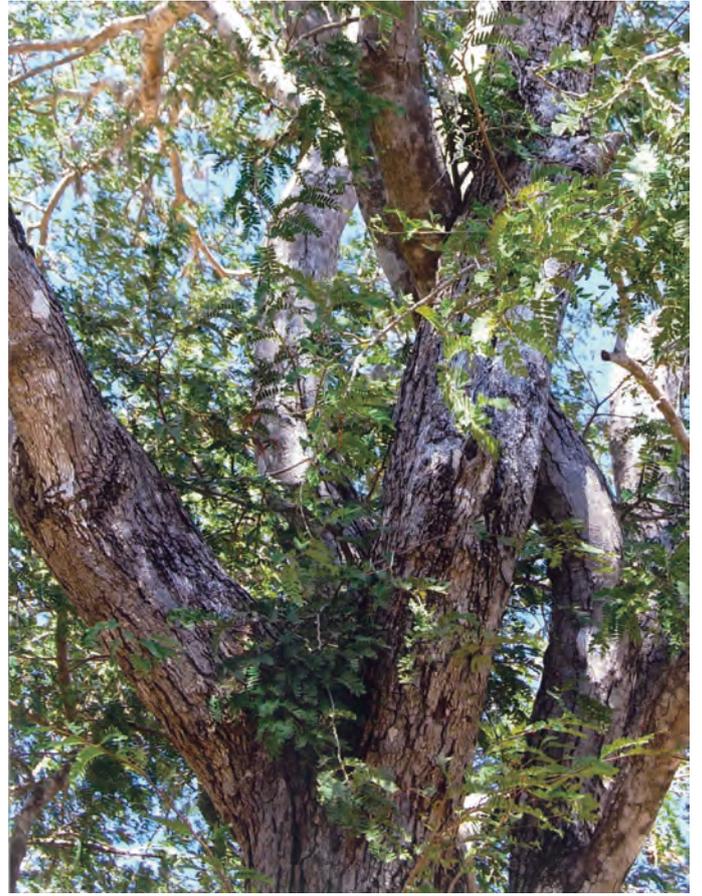


写真8 樹幹に多量の水を含む高木(種不明)



写真9 コモド島のピンクビーチ



写真10 同海岸のサンゴの断片

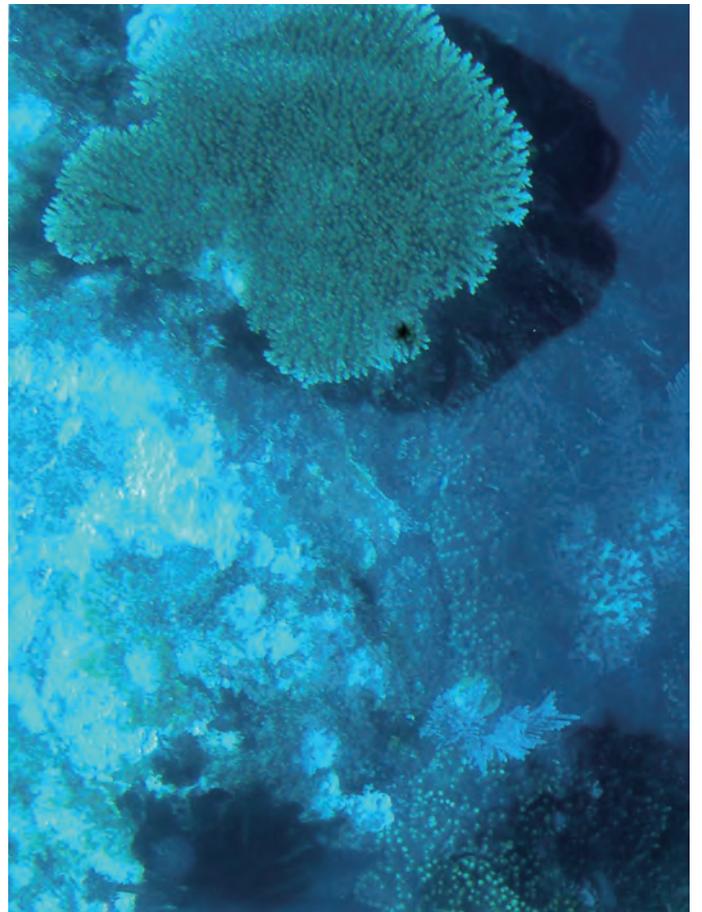


写真11 海底のサンゴの繁殖状況